

駐日イスラエル大使館: 歴史年表

<https://embassies.gov.il/tokyo/AboutIsrael/history/Pages/%E5%B9%B4%E8%A1%A8.aspx>

※BCE: before the Common Era / CE: the Common Era 「共通紀元」

BC: Before Christ / AD: Anno Domini”(ラテン語)「主の年に」

17th-6th C. BCE 聖書時代

(BCE - 紀元前)

17 世紀頃

紀元前 17～6 世紀－聖書時代

アブラハム、イサク、ヤコブ（ユダヤ民族の族長）がイスラエルの地に定住。飢饉により、イスラエルの民はエジプトへの移住を余儀なくされる。

13 世紀頃 出エジプト：イスラエルの民はモーセに率いられてエジプトを脱出、シナイ砂漠を 40 年間流浪し、その間にシナイ山で十戒などのトーラー（モーセ五書）を授かる。

13th-12thc. イスラエル民族がイスラエルの地に定住

c.1020 ユダヤの王政が始まる（初代王:サウル）

c.1000 エルサレムがダビデ王国の首都となる

c.960 ユダヤの民族的精神的中心をなす第一神殿をソロモン王がエルサレムに建設

c. 930 王国がユダとイスラエルに分裂

第二神殿時代

538-142 ペルシア・ギリシア時代

538-515 多数のユダヤ人がバビロンから帰還、神殿を再建

332 アレクサンダー大王がイスラエルの地を征服、ギリシアによる支配が始まる

166-160 ユダヤ教の制圧と神殿の冒涇に対するマカビ(ハスモン)の反乱

142-129 ハスモン朝下でのユダヤ人による自治

129-63 ハスモン朝下でユダヤ人が独立

63 ローマ軍司令官ポンペイがエルサレムを占領

63 BCE-313CE ローマ支配

63-4 BCE ローマのヘロデ王がイスラエルの地を支配。エルサレムの神殿を改築

(CE - The Common Era)

c. 20-33 ナザレのイエスのミニストリー（伝道活動）

アンティオコス 4 世【Antiochos IV】

前 212? - 前 164 か 163

シリア王。在位、前 175 - 前 164 か 163 年。アンティオコス 3 世の次子。〈エピファネス(顕神王)〉。前 190 か 189 年、父がローマに敗北したのち、ローマに人質として生活。前 176 年兄セレウコス 4 世が人質をその子デメトリオス(後の 1 世)に代え、彼は帰国。前 175 年暗殺された兄に代わり王位を兄の子と分かち、次いでそれを殺し王となる。前 170 - 前 168 年エジプトを勢力下に置いたが、ローマの干渉に遭い退却。

<世界大百科事典 第 2 版>

アンティオコス 3 世の子、セレウコス 4 世フィロパトルの弟として生まれたアンティオコス 4 世は、もともとミトラダテスという名前であったが、即位後(あるいは兄アンティオコスの死後)アンティオコス 4 世という名前を持ったようである。

アンティオコス 4 世はセレウコス 4 世の死後、権力の座についた。彼は紀元前 188 年にシリアと共和政ローマの間で結ばれたアパメア和約を受けて、ローマへの人質となり、同地で暮らしたが、セレウコス 4 世の正統な後継者である嫡子(後のデメトリオス 1 世ソテル)と交換されてシリアへ戻った。アンティオコスはこの機会を逃さず、まだ幼いセレウコス 4 世の継承者アンティオコス王子の摂政の座につき、数年してアンティオコス王子を葬ることに成功した。

アンティオコス 4 世の時代の事跡で特筆すべきことは、プトレマイオス朝との戦いに勝利を収めたことである。この勝利により、アンティオコス 4 世はエジプト征服の寸前までいったが、中東の軍事バランスが崩れることを危惧したローマ軍の介入と、ユダヤでおきた反乱(マカバイ戦争)のため、断念せざるを得なかった。アンティオコスはユダヤに対して圧政を持って臨み、エルサレムを破壊し、多くの敵対者を処刑した。これに対してユダヤ人たちはユダ・マカバイの一族であるハスモン家をリーダーとして立ち上がり、アンティオコスの派遣した軍を撃破するなど各地で奮闘した。アンティオコスは怒りにかられて自らユダヤ侵攻軍を率いたが、道半ばにして急死した。紀元前 163 年のことであった。

アンティオコス 4 世は勃興しつつあったパルティア王国への派兵も繰り返しており、作戦の当初においてパルティア軍を打倒したが、これも王の急死によって断念された。アンティオコス 4 世の継承者となったのはまだ幼かったアンティオコス 5 世エウパトルであった。

この時代はセレウコス朝が勢いを見せた最後の時代となった。彼の死後、幼い王子が残されたため、セレウコス朝は混乱し、以後は衰退の一途をたどることになり、約 100 年後にローマによって滅ぼされることとなる。

<Wiki>

【シリア王国】

[歴史]

セレウコス 1 世はアレクサンドロス大王の死後バビロニアの総督となり、前 312 年地歩を確立(セレウコス朝暦第 1 年)、大王の後継者たち(ディアドコイ)の争いの渦中で勢力を拡大し、西は小アジアから東はインド国境におよぶ広大な領土を獲得した。しかし、その後はたび重なる戦争(とくにプトレマイオス朝とのシリア戦争)、王家内部の紛争、王国内各地の離反独立(ペルガモン、パルティア、バクトリアなど)によって弱体化し、アンティオコス 3 世(在位、前 223 - 前 187)のとき、内政改革と再征服遠征によって一時的に衰勢をたてなおし大版図を回復したが、東地中海に力を伸ばしたローマに敗れて頓挫し、アンティオコス 4 世(在位、前 175 - 前 164 か 163)の膨張政策と国内改革も、ローマの介入やユダヤの反乱などによって挫折を余儀なくされた。前 160 年にはパルティアの勢力拡大に屈してイラン西部を併合され、前 129 年にはメソポタミアとユダヤを最終的に失って、王国は北シリアと東キリキアのみになり縮小、その後は一段と混迷を深め、前 64 年ポンペイウスによってローマに併合され滅亡した。…

マカバイ戦争 (マカバイせんそう、英: Maccabean revolt)

紀元前 167 年に勃発したセレウコス朝に対するユダヤ人の反乱とそれに続く戦争。主要な指導者ユダ・マカバイにちなんでマカバイ戦争とよばれる。この戦争の結果、ユダヤ人の独立勢力ハスモン朝の成立を見ることになる。マカバイ戦争をユダヤ側からの視点で描いたものが旧約聖書外典の「マカバイ記」である

<発端>

イスラエルはディアドコイ戦争の後にプトレマイオス朝の支配する所となっていた。その統治下においてユダヤ人の生活は比較的平穏であったと考えられている。その後、数次にわたるシリア戦争の後、イスラエルはセレウコス朝の支配下に入った。

イスラエルを征服したセレウコス朝の王アンティオコス 3 世は地元の支持を得るためにユダヤ人に寛容な姿勢を持って望んだが、彼の死後王位を継いだセレウコス 4 世、そしてその後のアンティオコス 4 世エピファネスの時代に入ると、ユダヤ教団内部の対立に端を発してにわか情勢が変化した。

セレウコス 4 世の時代、エルサレムの大祭司であったオニ阿斯 3 世と神殿総務長であった名門ビルガ家のシモンが人事を巡って対立していた。シモンはセレウコス 4 世に対しオニ阿斯 3 世の讒言を繰り返したが、結局オニ阿斯 3 世はシモンに対して優位を維持した。

しかし間もなくセレウコス 4 世が死去し、アンティオコス 4 世が王となると、大祭司オニ阿斯 3 世の弟イアソン (ヤソン) はトビヤ家の支援を受け、莫大な貢納金をセレウコス朝に納めて大祭司職を得た。イアソンは更にアンティオコス 4 世に対し自分の権限でギュムナシオン (体育場) やエビペア (青年団) を設立し、エルサレム市民をアンティオキア市民として登録することが許されるならば更なる貢納を行うと提案し、これが認められたために支配権を握り大規模なギリシア化政策を実行した。

その後、紀元前 172 年にはシモンの弟であるメネラオスがイアソンを上回る貢納金を納めて大祭司職を得、イアソンは地位を失った。メネラオスは (恐らくセレウコス朝の指示によってであるが) 勝手にエルサレム神殿の財産を持ち出すなどしたために敬虔派のユダヤ人の憎悪を買った。そんな中でエジプトに遠征していたアンティオコス 4 世が死亡したという噂がイスラエルに流れた。これを好機と見たイアソンは地位回復を目指して挙兵し、エルサレムを一時占領したが結局破られて死亡した。

ところがこのイアソンの挙兵はエジプト遠征中のアンティオコス 4 世に「ユダヤ人が反乱を起こした」と報告された。実際アンティオコス 4 世にしてみれば遠征中に後方で起こった騒乱、しかも彼が任命した大祭司に対して武力行使に及んだイアソンの行動は反乱以外の何者でもなかったかもしれない。アンティオコス 4 世はエルサレムに進軍して神殿を掠奪し多数のユダヤ人を殺害、又は奴隷とした。そして要塞を築いて非ユダヤ人を駐留させ監視させるとともに、ユダヤ人に対しユダヤ教の律法に基づいて生活することを厳禁した。そしてエルサレム神殿はゼウスの神殿とされた。

こうした中、紀元前 167 年に、セレウコス朝の将軍リュシアスは、アンティオコス 4 世の代理としてユダヤ人達にゼウス神への奉納を命じた。エルサレムの祭司家やヘレニズム的な貴族らは親セレウコス朝の立場を取ってこれに従ったが、地方都市モディンの祭司マタティアは、これを強制したセレウコス朝の役人とその仲間の親セレウコス朝的なユダヤ人を殺害した。そしてマタティアが 5 人の息子たち (ヨハネ、シモン、ユダ、エレアザル、ヨナタン) と共に山中に隠れると、セレウコス朝に対する敵意を募らせていたユダヤ人がそこに集まった。マタティアはこれを軍に組織し、次第に本格的な反乱となっていく。

ユダ・マカバイの勝利

マタティアは当初、息子たちと小規模なゲリラ戦を行って異教の神殿を破壊していたが、間もなく死去した。彼の死後に跡を継いだ息子のユダ (ユダ・マカバイ、ユダス・マッカベイオス) は父の勢力を継承してセレウコス朝からの独立を目指す戦争を開始した。ユダと兄弟たちはセレウコス朝の将軍ゴルギアスをエマオの戦いで破り、続いてベト・ズルでリュシアスも撃破し、紀元前 165 年末にはエルサレムを包囲してセレウコス朝軍を要塞に封じ込め、エルサレム市内に入場した。そして紀元前 165 年 12 月 25 日、エルサレム神殿からヘレニズム的な司祭を追放し、異教の祭壇を撤去することで神殿を清め、再びヤハウェ神に奉納を行った。この出来事を今も記念するのがハヌカーと呼ばれるユダヤ教の祭である。

その後ユダは周辺諸地域に兄弟を派遣して支配範囲を広げたが、アンティオコス 5 世の治世に入るとリュシアスの下でセレウコス朝も反撃に転じた。戦いは一進一退を続け、リュシアスは一時エルサレムを包囲するなどの活躍を見せた。

デメトリオス 1 世の治世に入ると、リュシアスはセレウコス朝内部での権力闘争のため、ユダヤにかまけていられなくなったのでユダヤ人がシリアの宗主権を認めることと引き換えに、ユダヤ人の信仰は認められるという条件の和議を結んで撤退した。ユダと共に戦った多くのユダヤ人にとってここでこれまでの戦いの目的の大部分は達せられたが、その後の方針を巡って大祭司アルキモスを中心とする和平維持派と、ユダを中心とする完全独立派の内紛が発生した。

両派の対立は次第に激化し、遂にアルキモスはセレウコス朝の支援を要請する挙に出た。これに応じたセレウコス朝は将軍バッキデスを派遣した。ユダは 2 度に渡ってバッキデス率いるセレウコス朝軍を撃退したが、紀元前 160 年のエラサの戦いではバッキデスに対して大敗を喫し戦死した。こうしてアルキモスらの勢力も増大したが、翌年にはアルキモスも死亡してしまった。

このため指揮権はユダの弟のヨナタンに引き継がれた。ヨナタンは巧みな政治力とセレウコス朝の内紛によって支配権を確立した。そして紀元前 152 年、ヨナタンはアルキモス死亡以来空位が続いていた大祭司職に就任した。しかしマカバイ家（別名ハスモン家）は伝統的な祭司家ではなく、この処置にはユダヤ人側からの反発が強かった。立場の弱いヨナタンはこれまでのマカバイ家の反セレウコス朝政策を転換し、親セレウコス朝的な政策を採用した。これによってセレウコス朝から「将軍」や「共同統治者」の称号を得、更にエルサレム教団に対するセレウコス朝の特典を更新した。

ヨナタンの死後、あとを継いだシモンは「偉大なる大祭司」や「将軍」などの称号を用いるほど強力な支配権を握り、紀元前 142 年にはセレウコス朝軍のエルサレムからの完全撤退をみた。この年をハスモン家元年とする独自のコインを発行し、ローマとの間に外交関係を結ぶなどして、**ユダヤは事実上の独立王国となった。**

前 37 年にはヘロデがローマの宗主権のもと王位についた（ヘロデ朝とも言う）。ヘロデ王はローマの権威を背景としながら、ユダヤ人の歓心を買うことに努め、イエルサレム神殿を大改築した。しかし、その死後、内紛から混乱が続いたため、ローマ帝国は紀元 6 年、パレスチナを属州として総督としてポンティオ＝ピラトを任命し、ローマの直接支配を受けるようになった（ローマ時代のパレスチナ）。ただしローマ帝国は、ユダヤ教に対してはその信仰を認め、ユダヤ人を宗教を理由に迫害することはなかった。